

問題

社会的自我に関する G.H.ミード及び C.H.クーリーの理論について、それぞれ説明せよ。

解答のポイント

1. 社会的自我の定義

「社会関係を通じて形成される」という特徴を示しておきたい。

2. G. H. ミードの理論

「客我 (me)」と「主我 (I)」(訳語と英語のどちらかが書けていればよい)、「プレイ段階」と「ゲーム段階」、「一般化された他者」のキーワードは示しておきたい。

3. C. H. クーリーの理論

「鏡に映った自我 (自己)」,「第一次集団」のキーワードには触れておきたい。

4. ミードの自我論とクーリーの自我論の違い

問題文では 2 人並べているのだから書けた方がよいが、ミードによるクーリー批判は公務員試験対策としてはかなりマイナーな知識であるため、書けなくてもよいだろう。

なお、時代順としては、「クーリーの自我論→ミードの自我論」なので、本来であればその順番の方が書きやすいが、解答例は問題文に合わせた順番にしておいた。しかし、一通り論点に触れていれば、順番は逆でもかまわないだろう。

解答例

「社会的自我」とは、他者との社会関係を通じて形成される自我のことである。R. デカルトに代表される近代哲学では、自我は生まれながらに人間に備わったものだと考えてきたが、アメリカの社会学者の G. H. ミードと C. H. クーリーはこのような見方を批判し、自我は他者との関連において社会的に形成されるという自我の社会理論を展開した。

まずミードは、人間の自我は他者の役割・態度を取得する過程の中で形成されるとした上で、自我を、社会的価値・役割を内面化した部分である「客我 (me)」と、客我に対する積極的・主体的反応である「主我 (I)」の 2 側面に分けて考察した。そして、自我の発達過程において、当初の「プレイ段階」では、対面関係にある重要な他者との相互行為の中で相手の態度や視点を学んでいくが、「ゲーム段階」になると、複数の他者の多様な役割期待を組織化・一般化して「一般化された他者」の役割期待に 대응していくようになるとした。

またクーリーは、人間は、他者との直接的で親密な接触の過程の中で、鏡としての他者の反応を通じて自分自身を認識し自我を形作っていくとして、他者の反応から得られるこの自我の社会的側面のことを「鏡に映った自我」と呼んだ。そして、自我発達の基礎となる集団として、「第一次集団」の概念を提示した。「第一次集団」とは、成員相互の親密で直接的・対面的な結びつきと協同を特徴とする集団である。この集団は、個人の社会性と「第一次的理想」(親切・忠誠・奉仕・公正等)を形成する上で基礎となる点で、第一次的とされる。例としては、家族、近

隣，子どもの遊び仲間が挙げられる。

時代的に先行していたクーリーの自我論に対して，ミードは，クーリーの他者像は観念的であると批判して他者を具体的・現実的に考察しようとした点で異なるが，ともに社会学における自我論の古典として評価されている。

以上
(779 字)

TAC 生はココで解けた！

クーリーの自我論については，専門記述対策レジュメ（政治系）P. 119 に掲載している特別区Ⅰ類の過去問をしっかり学習していれば記述できる。